

バングラデシュの国づくりに貢献

～野菜栽培の指導に取り組む～



試験場のスイカ畑で



原田 三男 (三十歳)

鹿本郡植木町
前青年海外協力隊員

バングラデシュの大地を踏んだのは、昭和五十六年四月のことでした。青年海外協力隊の一員として農業省に配属され、甘橘及び野菜種子研究所で昭和五十八年九月まで、二年五ヶ月間勤務してきました。

首都ダッカから北へ三百二十キロ、インド国境近くの地方都市ロングプールが私の任地でした。

ロングプールは、バングラデシュの中でも最も開発が遅れ、農業生産も低く、また農業技術も遅れている地域です。この地方の主な作物は、米、ジュート、タバコ、サトウキビで、タバコの生産量は全国一を誇っています。しかし、野菜の栽培は自家消費程度で、盛んな所とは言えません。野菜や果物の多くは二百キロ離れたナトール、ラジシャヒ地区から運ばれてきています。この国の食生活はカレー料理に代



出席にバブカ農協総会

表され、野菜の摂取量が少ないもので、すから食料の増産とともに、栄養の改善が叫ばれています。都市部では、外人居留者の増加の影響を受け、野菜の消費が伸び始め、少しずつ変化がはじかっています。そのため、大都市近郊の農業も少しずつ変化してきています。しかし、そうした外的

域の野菜振興に力を入れなければならぬと痛感しました。私の仕事は研究所での試験栽培が中心でしたが、開発されていく品種の普及の地盤を作っておくため、日本人

に理解のあるバブカ農協を普及の中心として活動することにしました。バブカ農協のマネージャーは、日本で研修を受けた親戚の家であり、非常に協力的でした。

しかし、村での活動は必ずしも思いどおりにはいかないこともありました。種子の注文を受け、わざわざダッカまで出かけて買ってきた種子を、いざ配布の段階になると要らないという人が現れたりと、配布した種子を売ってしまったという人もいました。村人に不信感を抱き、落胆させられることもしばしばでした。しかし、これが村の生活の現状でもあるのです。農村の生活は、ひと握りの裕福な人を除くと、あとは皆変わりません。我々から見れば、農具らしき物は牛耕用のスキとクワ、カマがあるだけで、大家族の農家の暮らしは決して楽ではありません。しかし、そういう状況の中の活動でしたが、

励みになったのは、素足に裸で、明るく我々を迎えてくれる子供たちでした。

青年海外協力隊

開発途上の各国へ日本の若人を派遣し国づくりに協力している。本国では現在まで一万余人を派遣。現在十六人が十四ヶ国で活動中。募集は年一回(四月十五～二十)と十一月(十一月十三～十七)の二回。問い合わせは県広報外事課または国際協力事業団熊本出張所まで



バングラデシュ人民共和国

- 総面積：14万3,998km²
- 人口：9,262万人(1982年)
- 資源：天然ガス・石灰石・ベンガル湾の油田開発中
- 首都：ダッカ
- 産業：労働人口の77%が農業に従事。主要産物はジュート、米、茶



水ガダ行商の子供たち



目標達成は、「有言実行」で。

六年前に矢部高校に赴任した時、スポーツテストや体力診断テストの結果を見て、この生徒は陸上競技特に長距離走に適していると思った。幼児期より起伏の激しい地理的条件の中で生活し、長距離走の基本となる足、腰、心肺機能形態が日常生活の中でトレーニングされている状態だからである。

しかし、実際に指導を始めると、学内の練習では気がつかなかったことだが、大会になると、準備運動を競技場の片隅でコソコソと行っている。

自分たちの存在を他のチームに認識させるといふ効果をねらったわけである。

生徒に自信を持たせるためには、当然指導者自身が自信を持って指導しなければならぬ。指導者の一挙一動が敏感に生徒に反応するからである。生徒の好不調を左右するのは指導者自身であると言っても過言ではない。

私は一貫して生徒に、自分の指導者を信じ、自分の力を信じ、自分のチームを信じろと言いつづけてきたが、

させるようにし、「不言実行」より「有言実行」の精神である。それは指導者についても同じことが言える。

最近の生徒たちは、勝利の裏には日常生活におけるたゆまない努力精進の過程があることが目に映らず、華やかな場面だけを追い求めようとする傾向がある。やはり、精神的、体力的に成長が著しい時期に、自己に合った目標をひたすら追い求めることが必要ではないだろうか。

これからの熊本の若者のたゆまない努力、前進を期待したい。

私の1000字提言

るのであった。有名校のネームバリューに押されたのだろうか、郡部というハンデイがそこに存在しているように思った。

これは、自分のチームに対しての自信のなさの表われであり、そのハンデイを取り除くことが最大の課題であった。

そこで、同じ高校生、同じ競技者ということを生徒に認識させることによりハンデイを取り除くことを考えた。試合のたびにグラウンドの真中で大きな声で準備運動を必ず実行させたのである。大きな声を出すことにより試合での緊張感を取り除き、グラウンドの真中で行うことにより

この三つを信じていることが、どのような条件であろうと好記録をつくる最大の要因ではないかと思う。

また、長距離走においては、長時間生理的限界に近い苦痛を克服しなければならぬために、強い精神力と体力の養成に努める必要がある。

この二つの養成には、早朝トレーニングを義務づけた。朝早く起きることにより自己の目標を認識させ、日常生活を規則正しいものにし、朝から生徒の顔を見ることが生徒自身の体調をつかむのに役立つ面もあるからである。

さらに、自分の目標を言葉に出し、その責任感から目標に向かって努力

県立矢部高等学校 陸上部監督

奥山 幸男

＜矢部高校陸上部 近年の成績＞

- 県高校総体 55年総合優勝
- 県高校駅伝 58年優勝
- 全国高校駅伝 58年9位
- 県高校クロスカントリー 55・58年優勝

